





す。ちなみに《ギョーム・テル》第4幕第3場の舞台は「ルツェルン湖畔の岩場」でした。

写真と説明はこちら。[http://en.wikipedia.org/wiki/Lion\\_Monument](http://en.wikipedia.org/wiki/Lion_Monument)

でも、ペーザロに行かなかった方には、この話そのものが意味不明ですね。ごめんなさい。上演の2日目と3日目は収録されたので、1年後にはDVDやBDで観ることができるでしょう。それまでお待ちください。

筆者は最初の3回を観劇しましたが、演奏は2日目が完璧でした。3日目はフローレスの歌う第4幕のアリアのカバレッタにちょっとあぶないところがあり、拍手を受けながらばつの悪そうな表情をしていました。

3日目の席は1列目中央、指揮者のすぐ後ろだったので、最初の2回に見えなかった舞台の全景を見渡せました。最後に振られる旗も、スイス国旗、血、共産主義の赤色ではなく、朱色に近い淡い色でした。

《エジプトのモゼ》のヴィックは、演出のコンセプトやメッセージが観る者に伝わるよう視覚化しただけでなく、事前にイタリアの多くのメディア取材を受けていました。これに対し、今回はイメージを固定的に示すのではなく解釈に多様性をもたせ、具体的な説明を控えていたようです。

その結果、評者ごとに解釈が違います。突き上げた拳固や赤旗から「ロッシーニを共産主義者にした」(『ウニタ』)、「社会主義者」(『イル・ジョルナーレ』)と解釈したり、スターリンをイメージした人もいます。スターリンに関しては13日付の地元紙に、ボローニャ歌劇場合唱団員の一人がヴィックに向かって「私たちはこうやってスターリンと共産国家を賛美することにしましょう」と言い、演出家の神経を逆撫でした、との話が載っていました。

筆者はヴィックが、世界各国の観客がそれぞれの民族の歴史、知、記憶の層から異なる解釈を導くよう仕掛けたのだと勝手に想像しています。支配する人間と支配される人間、抵抗する人と屈従する人の姿、過剰かつリアルに演じられる暴力も、見る人ごとに異なる記憶や反応を呼び覚まします。第1幕フィナーレでは娘を誘拐されそうになったルートルドがゲスレルの部下を殺して逃げてきますが、ヴィックは本来登場する必要のない恐怖に震える少女——白衣の下半身に血がついていてレイプされたことを表します——を登場させていました。ゲスレルは変質者さながらの笑い顔の、サディスティックでイカれた権力者として存在し続けます(その顔つきはどこかで見たような気もしますが、思い出せません)。

ともあれ、これほど全編に抑圧と暴力を視覚化してみせた演出は稀です。でもその抑圧や暴力が、現在も世界のどこかで日常的に行われていることを観る人は思い出さずにいませんし、怒りを共有し、抵抗し、戦え、とのメッセージも充分に伝わってきました。民衆に混じったマティルドがゲスレルに向かって拳を突き上げる姿も、強く印象に残っています。

演奏について一言。レート・ミュラーは、「マリオッティのテンポが遅い！ 第1幕だけで7月にヴィルトバートで行ったフォリアーニ指揮の演奏より10~15分以上長かった。それにロマンティックすぎる！」と批判的でした。確かに全体に遅めのテンポでしたが、このオペラをロマン主義の先取りと考える筆者にとっては速度と表現に関して違和感がありませんでした。その感動的なフィナーレにロッシーニは真の天才、《ギョーム・テル》は傑作中の傑作、とあらためて思いました。

《なりゆき泥棒》と《アルジェのイタリア女》も、2回目は平土間ではなくパルコで見たので印象が違いました。が、ここでは《アルジェのイタリア女》の3日目がDVD用の収録をしているのに旅客機の残骸がちゃんと落ちなかったり、ムスタファがパイアグラを飲んで股間から2度出るはずの白煙がまったく出なかったり、とアクシデントの多かったことだけを記しておきます。当たり前の話ですが上演は1回ごとに出来が異なり、席によって見え方や印象が違います。最低でも2回、《テル》のような傑作は3回でも物足りない……なんて書くと、怒られちゃいそうですね。

## ▼ROF最終日《湖の女》に関する井内美香さんの緊急レポート！▼

24日午前5時20分(イタリア時間22時20分)、ROF締め括りの《湖の女》を観劇中の会員、海津幸子さん(電子オルガニスト)から、「ゼツダ先生が第1幕の途中で立っていらなくなりました。急遽、休憩中。心配です」との緊急メールをもらいました。10分後には「30分の休憩後再開のアナウンスあり。心配ではありますが、良かった」、40分後には「ゼツダ先生、笑顔で出て来られ続行です」との報告が。

その後イタリアの新聞で先生の無事を確認しましたが、演奏内容も知るべく音楽ライター&コーディネーターの井内美香さんに緊急レポートをお願いしました。以下、井内さんから届いたレポートを転載します。

## ◎ROF最終日《湖の女》

今年のロッシーニ・オペラ・フェスティヴァル(ROF)最後の演目は演奏会形式の《湖の女》だった。ROFにゆかりの深い若手歌手を中心に、アルベルト・ゼツダ指揮、ボローニャ歌劇場管弦楽団、合唱団が出演した。

この日の公演は市庁舎前のポポロ広場で大きなスクリーンでの生中継もあった。驚いたのは、第1幕のロドリゴのアリアが終わったところで、指揮のゼツダ先生が体調不良に見舞われ、音楽が中断した事である。今年85歳にしてROFの芸術監督と併設されているアカデミアのディレクターを務め、それに指揮が加わっての疲労だったのだろうか。立ちくらみのようになり、指揮台の後ろの手すりにつかまって身を支えているところを、オーケストラの団員達や棧敷席からかけつけたマリオッティ総裁などがマエストロを楽屋に連れて行った。

40分ほどの中断の後、続投がアナウンスされ、申し訳なさそうな笑顔で再登場したマエストロは、観客のブラヴォーと拍手に迎えられた。第1幕の終わりまでをそれまでと同じ集中力で指揮、休憩を挟んでオペラの最後までロッシーニの世界を堪能させてくれた。

歌手達の中では安定した歌唱で実力を見せつけたジャコモ5世役のホルチャック、ロドリゴのスパイラス、ダグラスのアルベルギーニらの男性陣に加え、若いコントラルト歌手キアラ・アマルが素晴らしいアジリタと



音楽性でマルコム役を歌った。エレナ役のソプラノ、カルメン・ロメウはこの難役を歌うには音程や音色などまだまだこれからの部分もあったが、最後を飾るロンド・フィナーレまで歌い切った。全員に、そして特にマエストロ・ゼッダに客席からの熱狂的な拍手があり、素晴らしかった今年のフェスティバルは幕を閉じた。  
(井内美香)

### ▼来年の ROF 会期と主要 3 演目▼

来年 2014 年の ROF の会期は 8 月 8～20 日の 13 日間。主要 3 演目は

《パルミラのアウレリアーノ》(マーリオ・マルトーネによる新演出)  
《幸せな間違い》(1994 年 ROF グラハム・ヴィック演出の再演)  
《アルミーダ》(ルカ・ロンコーニによる新演出)

《パルミラのアウレリアーノ》は ROF 初上演となる初期のオペラ・セーリアで、カストラートを起用したロッシーニ唯一のオペラです。アルサーチェ役がどんな声種で歌われるか——ソプラニスタ、カウンターテナー、男装女性歌手のどれかですが——も興味深いです。

《幸せな間違い》はロッシーニ 2 作目のヴェネツィア・ファルサで、感傷的でシリアスな内容の救出劇。筆者は 1994 年にヴィック演出を観て「工夫が足りない」と感じましたが、足りなかったのは当時の筆者の理解力だったかも。ともあれ ROF20 年ぶりの再演とあって楽しみです。

《アルミーダ》のロンコーニ演出は 1993 年に ROF で上演されましたが、「魅惑の園」のシーンでボローニャ歌劇場の女性合唱団員全員を網タイツのバニーガール姿で登場させるなどして大ブーイングをくらっていました(筆者も思い切りブーを叫んだ一人)。今回は新演出なので全然違うと思いますが、さらなる「挑発」を仕掛けてくる予感が……。

今年のすごい《ギヨーム・テル》の後になにができるのか……との不安もありますが、ROF のエネルギーと創造力はまだまだ右肩上がり。今回ゼッダ先生とお話しする機会がなかったので、現時点で出演者に関する情報は絶無ですが、9 月に先生が来日した際に探りを入れたいと思っています。

配布された会期と演目表



ROSSINI OPERA FESTIVAL  
XXXV Edizione  
8-21 agosto 2014

**AURELIANO IN PALMIRA**  
Regia MARIO MARTONE  
nuova produzione

**L'INGANNO FELICE**  
Regia GRAHAM VICK  
produzione 1994, riallestimento

**ARMIDA**  
Regia LUCA RONCONI  
nuova produzione

ROSSINI OPERA FESTIVAL  
Via Rossini, 24 • I-61121 Pesaro  
Tel.: +39.0721.38001 • Fax +39.0721.3800220

Informazioni  
Tel. +39.0721.3800294 • Fax +39.0721.3800220  
boxoffice@rossinoperafestival.it

f YouTube Twitter  
www.rossinoperafestival.it

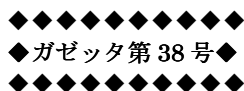
(2013 年 8 月 25 日 水谷彰良)

### ☆☆☆HP 管理人から☆☆☆

今年も ROF が終わってしまいました。ペーザロに通い詰めているイタリア人が、毎年 ROF が終わると、落ち込んでしまうと言っていました。購入したチケットの枚数が少なくなると、悲しくなるのは皆さんも同じでしょう。

ROF 開催中、多くの舞台写真や歌手の写真が、毎日 ROF の FACEBOOK に掲載され、それもまた楽しいものでした。観客の写真もかなり掲載されています。あなたや知っている方も写っているかもしれませんよ。

さて、私は今年ペーザロで、メルマガ・ガゼッタ第 12 号で取り上げたマエストロ・ゼッダの著書『Divagazioni Rossiniane』を購入しました。ロッシーニと ROF を愛する人に、という宣伝用シールが貼ってありました。飾っておきます(笑)。



ガゼッタ第 38 号をお届けします。

本号は、「HP リニューアル 1 年」「偉大なる“魅惑のひと”マエストロ・ゼッダ」「新譜 DVD2 点：《バビロニアのチーロ》《マティルデ・ディ・シャブラン》」「地方紙 Il Resto del Carlino の付録：ヴァッカーイ歌曲集 CD」をお届けします。

定期演奏会「《マオメット 2 世》抜粋」の詳細はこちらをご覧ください。<http://societarossiniana.jp/>

### ▼HP リニューアル 1 年▼

昨年 8 月末に日本ロッシーニ協会 HP をリニューアルし、1 年が経過しました。メールマガジン「ガゼッタ」9 月 7 日で創刊 1 年目を迎えます。これに併せて例会もリニューアルするなど、協会が新たな活動を展開する転換点にもなりました。たった 1 年間ですが、HP に新規アップした原稿はかなりの量にのぼり、メルマガに関しても「忙しいのに、こんなにたくさん書いて大丈夫？」と心配してくれる読者もいました。

管理人さんからも「メルマガ、月 1 回でもいいのでは？」と提案いただきましたが、当月 3 回のペースを維持したいと考えています。長く続けるには無理しないのが一番。ウケ狙いも背伸びもせず、マイペースで発信していきますので、読者の皆様にもご理解・ご支援のほど宜しくお願い申し上げます。

なお演奏会の準備で関係者が忙しく、また例会に使用してきたオカモトヤ 4 階会議室の閉鎖と北沢タウンホールの工事休館（11 月末まで）もあり、秋の例会の目途が立っておりません。11 月か 12 月に実施すべく、会場、テーマ、講師を検討中です。詳細が決まりましたら HP に発表しますので、しばらくお待ちください。

### ▼偉大なる“魅惑のひと”マエストロ・ゼツダ（東京フィルのサイトより）▼

東京フィルハーモニー交響楽団の 9 月定期演奏会で来日する我々がマエストロ、アルベルト・ゼツダ。ロッシーニ・ファンにはつとに知られる巨匠ですが、一般のクラシック・ファン向けにその業績と人柄を伝える文章を書いてほしい、との依頼で執筆したのが「偉大なる“魅惑のひと”マエストロ・ゼツダ」です。

これは東京フィルの 7 月定期演奏会プログラムに掲載されましたが、その後 8 月 26 日にウェブサイトにアップされました。ゼツダ先生の素顔を知る上で貴重な文章と思いますので、ご一読いただければ幸いです。

本文と写真は東京フィルの公式サイトからご覧ください。

<http://www.tpo.or.jp/information/detail-207.html>

会員で音楽ジャーナリスト、香原斗志さんによるインタビューも併せてご覧ください。

<http://www.tpo.or.jp/information/detail-210.html>

### ▼新譜 DVD2 点：《バビロニアのチーロ》《マティルデ・ディ・シャブラン》▼

#### ◎Rossini: *Ciro in Babilonia*

ロッシーニ：歌劇《バビロニアのチーロ》2012 年 8 月ロッシーニ・オペラ・フェスティバル上演  
ダヴィデ・リヴェルモレ演出 ウィル・クラッチフィールド指揮ボローニャ市立劇場管弦楽団&合唱団 ジェシカ・プラット (S) エヴァ・ポドレシュ (A) マイケル・スパイヤーズ (T) ミルコ・バラッツィ (B) 他  
〈収録：2012 年 8 月ペーザロ〉ライブ

[Opus Arte OA1108D] (DVD) 及び OABD7123D (BD) 海外盤・日本語字幕付き

#### ◎Rossini: *Matilde di Shabran*

ロッシーニ：歌劇《マティルデ・ディ・シャブラン》2012 年 8 月ロッシーニ・オペラ・フェスティバル上演

マーリオ・マルトーネ演出、ミケーレ・マリオッティ指揮ボローニャ市立劇場管弦楽団&合唱団 オルガ・ベレチャツコ (S) フアン・ディエゴ・フローレス (T) アンナ・ゴリャチョヴァ (Ms) キアーラ・キアッリ (Ms) パオロ・ポルドーニャ (Br) ニコラ・アライモ (B) ほか

〈収録：2012 年 8 月ペーザロ〉ライブ

[Decca (D) 0743813] (DVD2 枚組) [同 0743816] (BD)



昨年 ROF の上演映像が二つ発売されましたので、まとめて紹介します。

《バビロニアのチーロ》は同フェスティバル初上演となるロッシーニ初期のオペラ・セーリア。旧約聖書に題材を採る物語は、ペルシア王チーロに勝利したバビロニアの王バルダッサーレが捕虜にしたチーロの妻アミーラを奪おうとする。チーロは妻を救うべくアッシリア特使に変装して現れ、正体がばれて死刑を命じられる。だが牢獄のチーロがヘブライ人の解放を神に約束すると、最後にペルシア軍がチーロを救出してバルダッサーレが敗北する、という内容です。

この上演は映画と劇を合体させる演出家リヴェルモレの着想が斬新で、序曲の間に 1910 年代の人々が集い、古代を描く無声映画に魅せられ劇に入り込みます。映画は紗幕、天井と壁に立体的に映写され、舞台の人物と一体化します。実演では観る場所によって違和感もありましたが、映像では見事な効果をもたらします（とりわけ赤い照明で歌手たちが映写されたかのように浮かび上がる第 1 幕フィナーレが見事！）。

歌手はチーロ役のエヴァ・ポドレシュが驚異的な声量と技巧、凄みのあるコントラルトの声で聴き手を圧倒します。なんと御年 60 歳！ 次に素晴らしいのがバルダッサーレ役のスパイヤーズ——日本ではスパイレスと書かれます——で、バリト的な声質と特殊な高音のバリテノーレとして頭角を現しました。アミーラ役のプラットは歌唱に難があるものの頑張っています。嬉しい日本語字幕付き！

もう一つは昨年の目玉公演《マティルデ・ディ・シャブラン》。女嫌いの暴君コッラディーノがマティルデに籠

絡されて愛に目覚める過程を描くオペラ・セミセーリアで、初演は1821年ローマ。現在は同年ナポリ再演用の改訂版で上演されます。最初のROF上演は1996年、23歳のフローレスが主演コッラディーノを演じ、以後ペーザロでは8年ごとに再演されています。ちなみに天井に達する巨大な回転式二重らせん階段を中央に据えたマルトネ演出は2004年のロッシェニ劇場が初出で、昨年はアドリアティック・アリーナ用にアレンジされています。

なんといってフローレスが最高。登場のソロから力強い発声と輝かしいテクニックで圧倒し、喜劇的な表情と演技も抜群です（とりわけ頭が混乱する五重唱と第1幕フィナーレが出色）。マティルデ役のペレチャツコは高音が叫びがちで音程も不安定になる欠点はありますが、女の色気と魅力で好演。男装してエドアルドを歌うゴルヤコヴァ、放浪詩人イジドーロ役のボルドーニャ、アルコ伯爵令嬢役のキアーリ、侍医アリブランドのアライモと、脇役も全員が達者で個性的。マリオッティの緻密な指揮も相まって、大いに楽しめます。

残念なのは、フローレス専属のデッカ盤とあって日本語字幕の無いこと。国内盤は出るのでしょうか？

### ▼地方紙「Il Resto del Carlino」の付録：ヴァッカーイ歌曲集 CD（8月14日）▼

◎Nicola Vaccaj, La musica vocale da camera（ニコラ・ヴァッカーイ、室内声楽曲）  
Supplemento al numero odierno de QN il Resto del Carlino（14 agosto 2013） CD

演奏：Monica Carletti (Ms) Marco Sollini (pianoforte)

イタリアの地方紙「Il Resto del Carlino」に付録がつくことがある、との話はガゼッタ第7号に書きました。その時の付録はロッシェニ室内楽曲集のCDでしたが、今夏8月14日の付録はロッシェニと同時代の作曲家にしてペーザロで没したニコラ・ヴァッカーイ（Nicola Vaccaj, 1790-1848）の歌曲集でした（録音：2013年7月19・21日フェルモ）。

ヴァッカーイは声楽教本『イタリア室内歌唱の実践的メソッド』（1834年刊）の著者として名高く、オペラの代表作に《ジュリエッタとロメーオ》（1826年）があります。

筆者の知る限り、ヴァッカーイの歌曲のまとまった録音はこれが初。前回のロッシェニCDは翌年1月にイタリアのレーベルから正式発売されましたので、今回も遠からず発売されることでしょう。収録曲は次の全12曲。

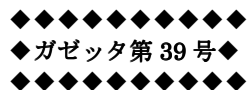
- 1) Non giova il sospirar
- 2) La Rimembranza
- 3) Io t'amo
- 4) Il Bagno
- 5) La Madre
- 6) Il Figlio
- 7) La Serenata
- 8) La Zingarella
- 9) Il Bacio
- 10) L'Ave Maria del Pellegrini
- 11) Il Cosacco del Volga
- 12) Sento una dolce speme (Variazioni sopra un tema di Haydn)



ピアノ伴奏はロッシェニの録音でも知られるマルコ・ソッリーニですが、肝心の歌手（モニカ・カルレッティ）がお世辞にも上手とは言えません。ヴァッカーイの音楽も凡庸で、イタリア歌曲作曲家として評価すべき点が見当たりません。

演奏に約15分を要する第12曲「Sento una dolce speme」がハイドンの主題による変奏アリア形式とあってそれなりに興味深いのですが、歌手がどうにも下手なので最後まで聴き通すのに忍耐を要します。関心のある方は、後日発売される市販品をお求めください。

（2013年9月5日 水谷彰良）



### ◆ガゼッタ第39号◆

ガゼッタ第39号をお届けします。

本号は、「ゼッダ先生の来日中止！」「日本ロッシェニ協会定期演奏会《マオメット2世》抜粋、近づく！」「《ギョーム・テル》批判校訂版のピアノ伴奏譜発売！」をお届けします。

定期演奏会「《マオメット2世》抜粋」の詳細はこちらをご覧ください。<http://societarossiniana.jp/>

### ▼ゼッダ先生の来日中止！▼

「ゼッダ先生が来日しなくなった！」と関係者から一報が入ったのは11日午前中。「ああ、やっぱり！」と感





10月11日に紀尾井ホールで開催する日本ロッシェニ協会定期演奏会《マオメット2世》の準備が進んでいます。聴けば聴くほどロッシェニの改革的オペラ・セーリアの頂点と実感する素晴らしい音楽ですが、声楽的には《セミラーミデ》以上の超絶技巧が必要で、ドラマと音楽の一体化でカットの場所にも頭を悩ませる毎日です。

残念なのはマイナー作品とあってオペラ・ファン注目度が低いこと。筆者も改めて楽譜を検分し、これほどでもない傑作との認識を新たにしました次第。メルマガの読者の皆さまも、お友だちを誘ってご来場いただければ幸いです……現状ではガラ・コンサートというよりガラガラの演奏会で、赤字必至です。

とはいえペーザロのロッシェニ・フェスティバルのコンサートも結構ガラガラだったりします。ROF だってお客が100人以下の演奏会は珍しくないのです……主に器楽のコンサートですが。学術的な催しはもっとひどく、1989年にミラーノで行われたブッチェニのシンポジウムを聴きに行ったら、何百人も入るホールに聴衆が20人しかいませんでした(笑)。

《マオメット2世》の詳細解説をHPに掲載すべく、現在執筆中です。HP上で詳しく紹介し、紙数の関係で演奏会のプログラムにはその要約を載せることになります。今月中にアップしますので、事前勉強と作品の理解にお役立てください。

### ▼ロッシェニ財団の新刊文献3点▼

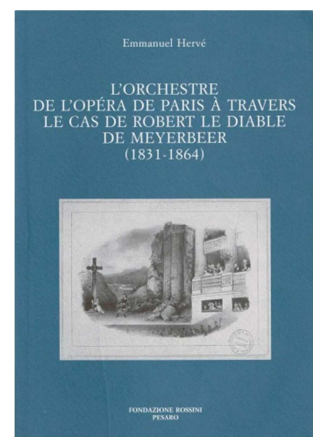
今年はまだロッシェニ全集の新刊がありませんが、ロッシェニ財団の文献は研究紀要を含め3点出版されています。いずれもクレジットに「2012年12月」とありますが、実際の発行は2013年です。

#### ◎Emmanuel Hervé, L'Orchestre de l'Opéra de Paris à travers le cas de Robert le diable de Meyerbeer (1831-1864) „Fondazione Rossini, Pesaro, 2012.

エマニュエル・エルヴェ『マイアペーア《悪魔のロベール》の事例を通じてのパリ・オペラ座のオーケストラ(1831-1864年)』ペーザロ、ロッシェニ財団、2012年。390頁、価格15ユーロ。

これはロッシェニ財団が新たに始めた、若い研究者を対象に募集したロッシェニ関係学術論文の第1回(2011年度)の優秀論文を書籍化したもので、エミーリオ・サーラを責任者とするシリーズ『ロッシェニ論文集(Tesi rossiniane)』の第1巻として出版されました。

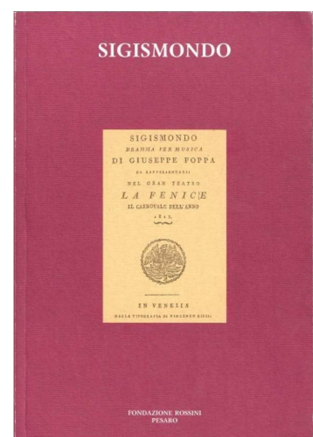
内容は題名にあるとおり、パリ・オペラ座のオーケストラの詳細をマイアペーア《悪魔のロベール》の1831-1864年の上演資料に基づいて解明するもので、当該オーケストラのメンバーと報酬の変遷、管弦楽の編成、配置、音色、ピッチの変遷、初演作の管弦楽法の分析など多岐にわたり、関連するドキュメントも多数掲載されています。



#### ◎Sigismondo (I Libretti di Rossini 18., a cura di Marco Beghelli) „Fondazione Rossini, Pesaro, 2012.

『シジスモンド』(「ロッシェニのリブレット」第18巻、マルコ・ベゲッリ編) ペーザロ、ロッシェニ財団、2012年。CXXIV+688頁、価格50ユーロ。

シリーズ「ロッシェニのリブレット」の第18巻は《シジスモンド》です。マルコ・ベゲッリの浩瀚な序文に続いてロッシェニ《シジスモンド》の原点に位置する小説と劇台本、ジュゼッペ・マリア・フォッパによる6種の台本とフォッパの回想録が複製され、台本研究に不可欠の文献となっています。



#### ◎Bollettino del centro rossiniano di studi., Anno LII 2012., Fondazione Rossini, Pesaro, 2012.

ロッシェニ研究所紀要2012年度版。ペーザロ、ロッシェニ財団、2012年。107頁、価格25ユーロ。次の三つが掲載されています。

- Maria Chiara Mazzi – Loris Rabiti., I Giorgi, una famiglia “rossiniana” (pp.5-27.)

ポーニャの女性作曲家マリア・ブリッツィ (Maria Brizzi, 1775-1812) に関する研究。

- Reto Müller., Bibliografia rossiniana 1996-2000. (pp.29-78.)

1996~2000年に世界で出版されたロッシェニ関係文献と論文の目録。日本ロッシェニ協会紀要『ロッシェニアーナ』も調査対象となっており、筆者の論考も多数リストアップされていてお恥ずかしい限りです。





・Maurizio Modugno, Discografia rossiniana, Parte prima. Le opera da Demetrio e Polibio a Il signor Bruschino. (pp.79-107.)

ロッシーニのディスコグラフィ第1部として、《デメトリオとポリービオ》から《ブルスキーノ氏》まで9作のオペラのディスク・データと编者によるコメントを掲載。

ロッシーニ財団以外の新刊ロッシーニ文献については次号で紹介いたします。

#### ▼ちょっとお洒落なロッシーニ・アニメのDVD▼

◎Gianini e Luzzati presentano “Omaggio a Rossini” L'italiana in Algeri / Pulcinella (Il turco in Italia) / La gazza ladra., Gallucci, Roma, 2012. Pal 仕様のDVD。全編33分、価格12ユーロ。

昨年4月にイタリアで発売され、気になっていたDVDです。だってタイトルは「ロッシーニへの贈り物」、続いて《アルジェのイタリア女》、《プルチネッラ（イタリアのトルコ人）》、《泥棒かささぎ》とあるので、てっきり歌をバックにしたアニメと思い込んでいたのです。ところがペーザロで買って視聴すると、《アルジェのイタリア女》は序曲のみ、《プルチネッラ》はピアノで演奏する「ダンツァ」と《イタリアのトルコ人》序曲、《泥棒かささぎ》は序曲のみで、台詞の無いアニメが映し出されます。

それぞれストーリーがあり、音楽と内容に関連のあるカラフルでお洒落なアニメーション。日本人とはセンスが違い、楽しめます。小学校低学年までの子供なら大喜びで観るかも……制作が1964～73年のため序曲の音の悪いのが難点ですが……。

ジュリオ・ジャーニ (Giulio Gianini, 1927-2009) とエマヌエーレ・ルッザーティ (Emanuele Luzzati, 1921-2007) は20世紀イタリアを代表するアニメーター&デザイナーのコンビで、ブックレットには映画監督フェデリコ・フェッリーニが《プルチネッラ》を絶賛する手紙も転載されています。

全編33分（10分、12分、11分）と短いので、例会の余り時間にでも紹介したいと思います。なお、次のサイトでアニメ《泥棒かささぎ》のシーンを見ることができます。

<http://www.michaelspormananimation.com/splog/?p=1856>

(2013年9月25日 水谷彰良)

